

大粒ダイヤの行方―芸者が一役

この時代の異常ともいえるダイヤモンド人気については前で述べたが、ところで、ダイヤモンド、特に大粒のダイヤの多くはいったい誰が買ったのだろうか。

『宝石百年』によると「何といっても株や船の成金一派、富裕な華族上層階級か、一流の花街^{かがい}方面が、その主たる得意先であった」。

大戦景気の時^{かりゅうかい}は花柳界の繁昌が絶頂に達した時期である。当時は多少の社会的地位にあるものは、連夜、料理屋や待合茶屋で豪遊することが増えた。待合茶屋とは客が芸者などと遊ぶところ。ここでは芸者は社交上必須のものとされ、花柳界は大いに栄え、その勢いは絶頂に達していた（『近世日本世相史』）。

成金たちはこうした場所に頻繁に出入りしていた。そのため、ダイヤは自分の妻や娘のために買うこともあったろうが、馴染みの芸者にわたったものも多かったと思われる（**図1-2-43**）。



図 1-2-43

大正期の芸者遊び

Wikipedia より

ダイヤの背後には芸者がいたことは当時は常識だったようで、大

正時代の流行歌「コロツケの唄」（大正六年）の三番にも次のように歌われている。

「芸者が嫌なら 身受けしてやる
帯も買ってやる

ダイヤもやろう やろう

今日は三越 明日は帝劇

いふて呉れるやうな客がない

アハハハ アハハハ

こりや可笑し」

（コラム117）

今日は三越あしたは天賞堂

当時の贅沢な消費を物語る実話もある。十五代目市村

羽左衛門うざえもんといえは大正から昭和初期の歌舞伎を代表する役者の一人。羽左衛門は艶福家としても知られ、芸者衆にもてた。

大正初期頃、羽左衛門は新橋の「くみ子」という芸者を好きになった。羽左衛門が色ぼけになったようだ、その頃の新聞に書かれるほど入れ込み、「けう（今日）は三越あしたは帝劇」という標語が三越デパートの宣伝部で考案された頃のことだった。羽左衛門こそ、けう（今日）は三越あしたは天賞堂という風に相手をつれてほしがるほどのものを買ってやった」（『東京おぼえ帳』③⑦）という。天賞堂で買ったものが何かは具体的には分からないが、ダイヤなどの装身具を相当数買ったであろうことは想像に難くない。

天賞堂でも、「羽左エ門はいいお得意様だった」（『青山雑記』③⑧）といっている。

成金ばかりでなく、羽左衛門のような役者も高級貴金屬宝飾店の有力の顧客であったことを示すエピソードである。

ダイヤとプラチナの絶妙の相性

この時代にはダイヤの台座としてプラチナが盛んに用いられた。

明治時代にはダイヤは金枠に入れられることがほとんどだったが、

この時代は断然プラチナの枠に入れられることが増えた。

ダイヤとプラチナの相性の良さは、一言でいえばダイヤはプラチナ枠でこそ白色が一層引き立つということである。

この点につき、『ダイヤモンド』の著者岩田哲三郎は、「ダイヤモンドを嵌装する材料として白金が遙に金に優る特徴を有してゐるのは疑ひなき事實で、殊に純良なる白色石に對して金を使用する時は必ず不成績に終る」と断じている。

プラチナも芸者が開拓

このプラチナ普及の功労者も芸者だった。美に對する見識が高く、身を飾るものに目が肥えていた芸者たちは、地味な輝きながら趣味の良さをアピールできるプラチナ製品を好んだ。

当時の事情をよく知る田中貴金属社長・田中一郎は、日本のプラチナ需要の特徴について、次のように述べている。

「当然ながら昔の芸者には退職金制度がないので、若くてきれいなうちはいいが、老後に備えて蓄財しなければならぬ。しかし、相手の男達にお金を求めることは、いやしい行為であり、結局、換金が容易な貴金属装飾品をねだる慣習となつた（中略）金製品もあつたが、それよりもかなり高価で、しかも目立たないプラチナ製品が好まれ、かんざし、帯留め、指輪などを身につけて芸者がお座敷はもちろん、芝居などを観劇、これが上流婦人階級にも普及していった（中略）日本人はいわゆるキンキラキンの成金趣味より控え目で、それでいて高価なプラチナを選択した」。

これは日本女性のプラチナ好きの社会的背景を深く知る上での貴重な証言といえよう（『プラチナの魅力』^{③⑨}）。

なお、芸者がダイヤやプラチナの需要を支えたというと奇異な感を受ける人も多いと思うが、これはそれほど不思議なことではなく、ヨーロッパの社会でもほぼ同じだった。

1912年に書かれたゾンバルト『恋愛と贅沢と資本主義』^{④⑩}によると、資本主義経済を回してきたのは、恋愛とセットになつた贅沢であるという。大都市に不可欠な劇場やレストラン、衣服や宝飾品といった贅沢品は、すべては恋愛、しかも非合法的な恋愛に對する欲望が生んだものである。光り輝く小間物、すなわち宝飾品を売る店も、現金は受け取らないが貴金属の装飾品なら受け取るという恋人のために、紳士が買い物をする店として発展したという。

レストランを料理屋や待合茶屋に置きかえれば、花柳界に出入りする男とそこで働く芸者たちの存在が、この時期の貴金属宝飾業の発展を牽引したと言えるだろう。

永井荷風『腕くらべ』の芸者の装身具風俗

この小説は芸者の世界を描いた永井荷風の大正五、六年の花柳小説。舞台見物（観劇）をする芸者の身なりを描写した場面にダイヤや真珠の指輪や和装の装身具が登場している。一人の芸者の装身具は、「帯留の金具は何やらいわれあるらしい素銅すあかの目貫めぬき、さして大きからぬダイヤにプラチナの指環ただ一ツ、万事目立たずして相応に物のかかったつくり、いづれ何家なにやの誰ねえといわれる姐さんであろう」と好意的に描かれている。

またもう一人の、目いっぱい飾りたてた芸者については、「真珠を入れた蒔絵の櫛笄（中略）宝石入りの帯留、びっくりするほど大きなダイヤに真珠の指環これだけでも千円以上と思われた」と成金趣味を描写。

ダイヤ、真珠、プラチナという大正期に人気の高かった宝石や貴金属が描かれ、値段まで書き込まれた荷風ならではの小説である。

洋の東西を問わず、宝飾品というものは顕示的消費（見せびらかしのための消費）の最たるものである（ヴェブレン『有閑階級の理論』④参照）。だが、見せびらかしを示す方法は国により多少の違いがある。荷風も好感を持って描いているように、日本ではどちらかといえば、目立ちすぎない抑制的顕示を好む人が多かった。それにはプラチナが最適だったのだろう。

日本ダイヤモンド株―初のダイヤモンド専門会社も設立される

大戦景気に沸いた大正六年には、御木本真珠店出身の小林豊造によって日本ダイヤモンド（株）が設立された（図1-2-44）。この会社はダイヤ、ルビー、サファイヤ等の原石を輸入して自社工場で研磨して販売することを目的にしたユニークな会社である。ダイヤモンド加工研磨機などは自身がベルギーから持ち帰ったものを御木本から移譲され、その一台をモデルに十数台ほど作り、それを使った『宝石百年』『ミキモト装身具100年史』④。

原石の輸入は大正六年11月で、「ロンドン市エスジョンズを介して豪州シドニーよりダイヤモンド原石二七〇カラット（価格三千五百円）」と「サファイヤー原石（価格五百円）を輸入した」（『ダイヤモンド』^{④③}）。日本におけるダイヤモンド原石輸入の最初である。当時としては、これだけの原石を輸入することは容易なことではなかったが何とかやり遂げた。

新会社（資本金50万円）に対する期待は大きく、業界から村松合資会社・村松万三郎（二代目）、山崎商店・山崎亀吉、細沼商店・細沼浅四郎などが株主となり、筆頭株主は御木本真珠店総支配人・池田嘉吉というそうそうたるメンバー（「鏝のあゆみ」^{④④}）。

だが、『わが組合史』によると「宝飾用の品は商業需要に応ずるほどの成功は得られず、翌七年にようやくダイヤモンドツール（工具）を売出すに過ぎなかった。しかしルビーやサファイヤのドリルやダイヤモンドを完成した」とある。

『日本ダイヤモンド工業五十年の歩』には「大正6年末に、日本ダイヤモンド株式会社が、ブリリアントカットに成功した。ダイヤモンド加工技術の萌芽である」と記されている（『ダイヤモンド―浜田義光の半生記』^{④⑤}）。だが、商業的に販売されるまでには至らなかったようだ。

小林は不運にも腸チフスにかかり大正十年に48歳で死去した。柱を失った同社は資金面の苦労が続いたが、関東大震災で焼けたダイヤモンドをリカットして利益をあげたことで経営はやっと安定した。このことについては2章の大正後期で紹介する。



図 1-2-44

日本ダイヤモンド(株)広告
大正7年9月『新演芸』

(コラム1-8)

小林豊造の功績

国内におけるダイヤモンド研磨業のパイオニアとして名を残した小林豊造だが、小林の成した功績はこれだけではなかった。

小林豊造(1874〜1921)は御木本真珠店を支えた御木本金細工工場(明治四十年創業)の二代目工場長であり、いわば日本の洋風装身具の開拓者であった。

小林は元は東京高等工業学校(通称・蔵前工業)教員養成所金工科の教員であり、明治三十六年8月から三十七年7月までの1年間、文部省嘱託として欧米の貴金属装身具業界の視察をした西洋通でもあった。

その小林を御木本幸吉が招いたのは明治四十三年。小林の工場長就任後、御木本真珠店は和洋の装身具に欧米風デザインと技術を加味して業界に先駆けて斬新な真珠製品を世に送り出した。細工品に透かし入りの腰張り様式を取り入れたことや、宝石のきめ込み技術、白金(プラチナ)張り、「御木本の15金」といわれた15金地金の開発も小林の成した仕事である(『御木本真珠発明一〇〇年史』)。

小林豊造はダイヤモンド研磨業のパイオニアであると同時に、伝統的日本の装身具を近代的洋風装身具へと転換させた最大の功労者の一人とっていいだろう。

ちなみに、小林豊造は文芸評論家として活躍した小林秀雄の実父である。



小林豊造

『ミキモト装身具 100年史』
より

御木本の小粒ローズカット・ダイヤモンド

日本ダイヤモンド(株)が設立された大正六年頃には、御木本真珠店は養殖半円真珠にローズカットのダイヤモンドや芥子^{けし}をあしらった帯留や首飾り、指輪、束髪^{くわみ}ピン(簪)、ブローチを盛んに製作したという業界記録が残っている(『わが組合史』)。

ローズカットとはブリリアントカット以前の旧式のカットである(図1-2-45)。

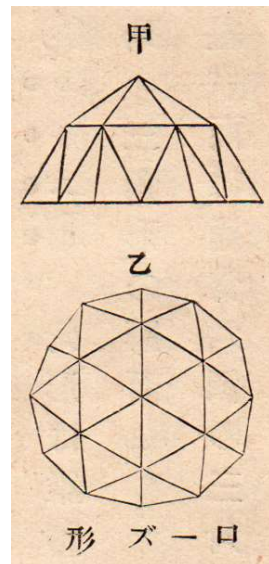


図1-2-45

ローズカットのダイヤモンド

『寶石誌』より

甲は側面図、乙は上面図。

確かに、この頃の御木本製品にはローズカットを用いたものが多いが、御木本は以前からメレサイズの小粒のローズカット、あるいはローズカット風不定形カットのダイヤを用いることが多かった。明治末期に作られた御木本初期の束髪簪(その後、帯留に改作される)などを見ると、ローズカットらしきダイヤを埋め込んだものがある(『ミキモト／真珠王とその宝石店100年』)。

とすると、御木本は大正六年以前には輸入されたローズカットを用い、それ以降は日本ダイヤモンド(株)のローズカットを用いたという推測も成り立つ。すでに述べたように大正六年頃にはブリリアン・カットが一応出来ていた日本ダイヤモンド(株)ならローズカットが出来ないことはないだろう。

なお芥子^{けし}は芥子珠ともいう。芥子の種子のように小さな小粒真珠の総称。偶然にできたもの、ピースが核に密接しなかったためできたものという。形状は様々だが、装身具にはほぼ真円のものが主に使われた。御

木本では芥子珠を留めることを「芥子定^{けしきま}」という。大正戦争体制期までの御木本の製品に多いが、御木本以外でも使った。

大正六年、初の業界団体―東京貴金属品製造同業組合設立

大正前期の大きな業界の出来事として記憶しておきたいことは、好景気を背景に大正六年（1917）、わが国初の業界団体である東京貴金属品製造同業組合が設立されたことである。

正式設立は大正六年だが、すでに大正三年には準則組合が発足し、大正三年12月には組合用刻印2種類が商標登録されている（図1-2-46）。



図 1-2-46

『日本登録商標大全、第7輯上』④より

組長（組合長）は業界の重鎮である山崎亀吉（1870～1944）（図1-2-47）。明治三十三年制定の重要物産同業組合法にそって設立されたもので、その特徴は「同業者に対して強制加入の権限を持ち統制力を持っていた」（『わが組合史』）こと。従って当時の有力製造業者のほとんどはこの組合に入っていた。

この組合は貴金属宝飾産業の救済と近代化のために各種の活動をしたことで知られる。

組合が最初に着手した事業は金地金の確保である。

第一次世界大戦中から戦後にかけて、貴金属需要の増大に伴って金地金が不足していた。

当時、日本の産金量は年間6～7トンに増加したが、それだけでは激増する金製品の需要は賄えなかった。「多くの業者は、たくさん注文をかかえながら金地金が間に合わないため、手をこまねいていたのであった。そこで山崎氏の組合が主唱して、金地金不足の緩和措置を政府に請願」。その結果、横浜正金銀行からアメリカの金貸の払い下げを受けることによってこの事態を打開した（貴金属製品の民間検定開設とその前後）。こうした資材共同購買事業は産業組合法によって「東京貴金属購買組合」を設け（大正八年）、ここを窓口に行った（『わが組合史』）。

大正の後期になると指輪寸法番型の制定や貴金属製品の品位検定などの画期的事業を実施したが、これらについては大正後期で紹介する。



図 1-2-47

山崎亀吉

『ダイヤモンドと銀座』

④7より

(コラム 1-9)

「^{こんじきやしや}金色夜叉」の歌―ダイヤモンドへの憧れを助長、そして「^{ダイヤ}ダイヤ」から「^{ダイヤ}ダイヤ」へ

大正七年に作られた演歌「金色夜叉」の歌は、**演歌師によつて歌われ**一世を風靡するほど大流行した。この歌は明治三十年(1897)から新聞小説として発表された尾崎紅葉の小説『金色夜叉』から題材をとつたもの。

一 熱海の海岸散歩する

寛一お宮の二人連れ

共に歩むも今日限り

共に語るも今日限り

(中略)

六 ダイヤモンドに目がくらみ

乗つてはならぬ玉の輿^{たまこし}

人は身持^{みもち}が第一よ

金は天下のまわり物

ここに出てくる「ダイヤモンドに目がくらみ 乗って
はならぬ玉の輿たまこし」というフレーズは特に有名。乗るなど
は言われても玉の輿、すなわち**高い地位の人**や**財産**のあ
る人に嫁とぎたいというのは女性が望むこと。このフレー
ズによってダイヤモンドへの憧れは一層高まった。



当時の演歌師

『演歌師の生活』④より

街頭で、バイオリンに合わせて演
歌を歌いながら歌本を売った。女
性が手に持つのが歌本（演歌ビラ
本）。

また、ここには「ダイヤモンドに目がくらみ」とあるよ
うに、ダイヤは「ダイヤ」や「モンド」と表記されている。

ところがこの歌の元となった尾崎紅葉の小説中では、古

い呼称である「こんごうせき金剛石」が用いられ、そこにはすべて「ダ
イヤ」や「モンド」とルビがふつてある。

ダイヤモンドのことを「ダイヤ」と表記するか、それと
も「ダイヤ」と表記するかは今でもしばしば話題になる
が、大正時代には、少なくとも大衆レベルではダイヤモ
ンドと**呼ば**れることが増えた。その背景として、ここに
紹介した「金色夜叉」の歌の影響が大きかったものと思
われる。

(コラム1-10)

宮沢賢治の宝石商計画

宮沢賢治は、「雨ニモマケズ：」や「銀河鉄道の夜」な
どの作品で広く知られる詩人であり童話作家。

もう一方で賢治は、「石ッコ賢さん」と呼ばれるほどの
鉱物好きであり、本気で宝石業の経営を計画していた。

鉱物から宝石へ興味が移ったのは妹の看病のために上京した時に神田で宝石の原石を扱っている水晶堂や金石舎などの鉱物・宝石商を見つけてから。大正八年1月には父親に宝石商になりたいという計画を打ち明ける。

宝石商といっても賢治が目指したのは宝石の加工や合成宝石の製造である。「この仕事を始めるには只今が最好期」である。なぜなら「経済の順況、外国品の競争少きを」と父親に出資を仰いだだが、良い返事はもらえなかった。そのため結局はこの計画は挫折した。

賢治の宝石店は陽の目を見なかったが、この頃より文学作品の中には多くの宝石が登場するようになり、作品に独特の彩りを与えるようになる（『賢治博物誌』⁴⁹）。

賢治の夢が実現していたら、どんな宝石店になったのか、興味は尽きない。

業界にも吹き荒れた大正デモクラシーの嵐―御木本工場のストライキ

第一次世界大戦で宝飾業者は利益を上げたが、多くの庶民は破産だ失業だと生活苦におびやかされていた。

一方で、ロシア革命（1917）が労働者を鼓舞し、吉野作造は「民本主義」を提唱し社会を刺激していた。米騒動が起き、労働運動も活発化していた。

こうした背景があつて、大正八年2月、御木本の工場（御木本貴金属工場）では、全従業員が待遇改善、経営刷新、工場長排斥を求めてストライキに入った。

新しく工場長になったのは斎藤信吉。斎藤信吉は当時熱心なクリスチャンで、週給制や実働8時間の労働体制を始め、厚生関係の工場改革を矢継ぎ早に行つたため事態はどうか収束した（『夢を食いつづけた男』⁵⁰他）。

御木本の争議は、労使間紛糾を回避した**労資協調の模範工場**として、内務省社会局によつて『新らしき工場経営法（革新せる御木本貴金属工場）』（大正十一年）としてまとめられ、全国の工場に配布された（図1-2-48）。

なお、斎藤信吉（1877～1945）（図1-2-49）は御木本幸吉の実弟である。大正八年に貴金属工場の工場長になり、また東京労働教会を創立してキリスト教による労資協調をはかり、工場改革

を成した。

その後神戸に移り、仲間と労働文化協会を創り、大正十三年には神戸労働学校を開設し学監となった。御木本には異色の人物が多いが、なかでも斎藤信吉は特異な存在だった(『画報日本近代の歴史8 民主主義の潮流』⁵¹)。

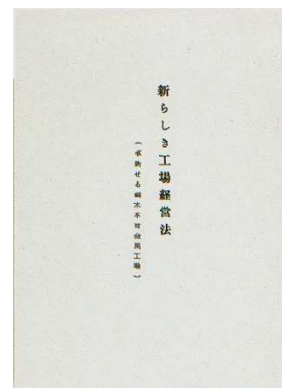


図 1-2-48

『新しき工場経営法』
『輝きの世紀』⁵²より

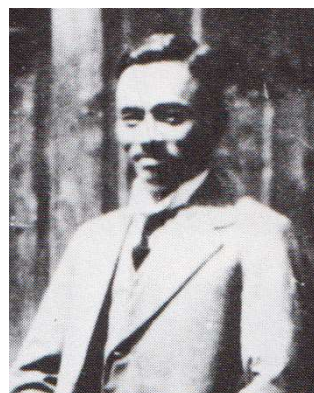


図 1-2-49

斎藤信吉
『画報日本近代の歴史8 日本主義の潮流』より

ヒスイの原石輸入の試み

ヒスイは人気の高い宝石であった。ダイヤモンド、真珠に次ぐ人気だったといっているだろう。そのためヒスイの原石の輸入を試みた人がいる。ほとんど知られていない話なので紹介しておく。

大正八年(1月〜4月)、日本ダイヤモンド(株)の小林豊造は、中

カントン

国の広東でヒスイの原石を当時の金額で一万円で購入し、東京に入荷。自信を持って買ったものの「切断して見ますれば結果は意外に悪しく外皮のみ青緑色有して居りますが、中味は白色に青緑の斑点状を呈して居る位にてとても想像もつかぬ有様で夢は覚めていかに損害を少なくするかの問題が残させられた」(『ジェードと商品知識十対三第一巻』⁵³)。

結局このヒスイ原石輸入は大失敗で、置物や、一部は指輪用、カフスボタン用に研磨したものの宝石として使えるものはわずかだっ

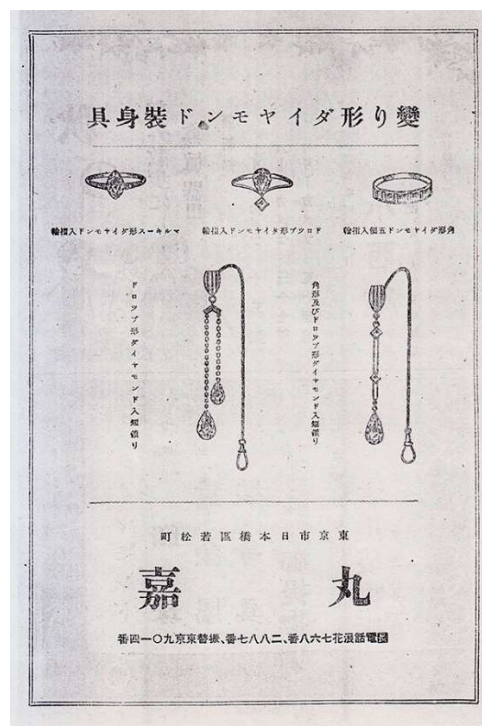


図 1-2-50
変り形ダイヤモンド装身具
丸嘉
大正 8 年 11 月『演芸画報』

ファンシーカットとファンシーカラーのダイヤモンドの大正前期の最後頃にはすでに変り形、すなわちファンシーカットのダイヤモンドも売られていた(図 1-2-50)。高級宝飾品店と知られていた丸嘉が扱ったもので上 3 点の指輪には角形(バゲット)、ドロップ形、マルキース形(マーキーズ)。下 2 点の短鎖には、角形、ドロップ形のダイヤモンドが使われている。いずれもブリリアント・カット。

丸嘉のような店は他にもあつたらしく、こんな早い時期に日本人がファンシーカットのダイヤモンドに興味を持ったことは「海外の宝石会社を感心させた」(『あなたの宝石』⁵⁴)という。

た。どうして、ダイヤモンドだけでなく宝石全般への知見も豊かなはずの小林豊造は失敗したのか。

それは、ヒスイ原石の良否の判断は極めて難しいというところにある。中国で取引されているミャンマー産のヒスイ原石の多くは、外皮は鉄分の褐色や灰白色で覆われている。一見すると河原にころがっている石とさほど変わらない。これでは原石の良否は分からないので、販売する側は、外皮一カ所に窓と呼ばれる中が見える箇所を作る。買う側はここに水をつけ、その良否を判断する。

このヒスイ原石の良否の判断は経験を要する難しい作業である。なかにはその部分を着色して良質のヒスイの原石にみせかけたものもあつたといわれる。博識の小林にもそこまでは見抜けなかったようだ。

その後、大正十二年頃には、またヒスイの原石の輸入を試みる人たちが現われ東京牛込に「東洋宝石舎」という会社も設立されたが、こちらにも成功には至らなかったと伝えられる。

大正前期にはファンシーカットのダイヤだけでなく、ファンシーカラーのダイヤも人気だった。記録によると、「ピンク、ブルー、ブルック・ステール等の変わり色にも、みんなの心が集まった（中略）ダイヤモンド自体にはなじみが薄いとはいえ、より美しい輝きを求める日本人の感覚意識を世界の宝石会社に周知させる好材料になった」〔あなたの宝石〕。

ファンシーカットやファンシーカラーのダイヤがどの程度普及していたかは別としても、こうしたダイヤに興味を示す業者やユーザーがすでにいたということは確かだろうだ。

日本で貴金属宝石店がダイヤを扱いだしたのは明治中期から〔日本の宝飾文化史〕。それからわずかな期間でここまでダイヤに対する興味が広がり、センスが向上した人々が出ていたのである。

ちなみに、ファンシーカラーのダイヤについては、東京国立科学博物館に戦時期に供出されたカラー・ダイヤモンドの標本がある。その中にはこの時期のものも含まれているかもしれない。

大正八年頃の真珠の大きさは？—中心は5ミリ台、最大でも6ミリ強
ここで、養殖真円真珠がある程度まとまって出始まった大正前期最後の頃の真珠玉の大きさについて見ておこう。

養殖真珠の玉の大きさは、使われている装身具の時代推定の大きなポイントとなるので、様式や地金素材だけでなく、その大きさにも注目したい。

大正八年（1919）、大阪堺市の浜寺はまできで初めて養殖真円真珠の入

札会が開かれた。出品は高知県宿毛すくもの予土水産よど。この真珠を作り出したのは「西川式」特許の普及に貢献した藤田昌世で、藤田の真珠は5ミリ台が中心で6ミリ台も少しあった。現在の真珠と比べるといかにも小さいが、これでも当時としては大粒で、「これほど大きい真円真珠がまとまって売り出された例はなく、日本中の真珠業者を驚かせる事件となった」〔真珠の世界史〕。

この時の真珠は、『日本真珠産業論』⁵⁵によると6ミリ台とはいっても最大でも6.6ミリの真珠しか出来なかった。大正八年に6ミリ強だった玉の大きさは、その後、少しずつ大きくなり、大正十二年には最大8ミリ、昭和十二年は最大で10ミリのものまで作り出せるよ

うになった（図1-2-51）。

図1-2-51
大正8年～昭和12年の最大真珠の重量と直径

年次	最大重量g（1個当たり）
1919（大8）	0.45g（6.6mm）
23（12）	0.75（8.0）
28（昭3）	0.86（8.4）
32（7）	1.21（9.5）
37（12）	1.69（10.0）

『日本真珠産業論』より

真珠の大きさは、使用する核の大きさとも密接に関係するが、この時代の核は直径二分（約3ミリ）に過ぎなかった（大正十五年には二分以上が多く使われた）（『日本真珠産業論』）。

地域産業動向①—サンゴ産地の彫刻技術の進展

サンゴの玉簪や根掛玉は大正期になっても日本髪飾りとして人気の高い装身具であった。サンゴはダイヤやプラチナの装身具とは違い、一部の富裕層だけではなく多くの女性が髪飾りとして用いた。ところが日本には丸玉加工の技術者は多かったがサンゴ彫刻の技術者はいなかった。そのため、彫刻されたサンゴを用いた帯留や髪飾りは発達していなかった。そこで水産講習所では、これまでであった貝殻彫刻専修のコース（明治四十二年開設）を大正二年（1913）に「珊瑚彫刻専修」と改め、本格的にサンゴ彫刻技術者の養成をはじめた。その後コースに変更はあったがサンゴ彫刻技術者の養成コースは大正十三年まで続き、その間42名の修業生を送り出している。この修業生は長崎、高知などのサンゴ産地や集積地でサンゴ彫刻をはじめた。

またサンゴ産地の五島（長崎県）では大正五年から七年にかけて、農商務省を通じて、水産講習所から講師を招きサンゴ彫刻の講習会

を開いている（『珊瑚—海の宝石その魅惑—』^{⑤6}）。
 こうしたなかから育った技術者によると思われるサンゴ彫刻の帯留（図1-2-52）や東髪簪（図1-2-53）が大正五年頃から売り出された。
 ただし、サンゴ彫刻の装身具が本格化するのには昭和初期になってからである。



図 1-2-52
 サンゴ彫刻帯留広告
 白牡丹本店
 大正5年12月『演芸画報』



図 1-2-53
 サンゴ彫刻東髪簪広告
 白牡丹本店
 大正5年12月『演芸画報』

地域産業動向②—甲府の貴金属工芸と水晶細工

好景気は甲府にも波及していた。
 甲府の貴金属工芸は第一次世界大戦後、大戦景気の波に乗り盛況だった。これまでの地金素材は銀や真鍮、洋白（洋白とは洋銀ともいわれる銅にニッケルなどを加えた白色合金）が中心だったが、大正五、六年頃から金の使用が急増し、金指輪、懐中時計用金鎖などの注文が殺到し、少数の業者では応じきれないほどだった。

機械化も進み、大手の保坂貴金属店では大正五年に県下業界のトップをきってプレス機や圧延ロールなどを導入し量産体制を整えた（『水晶宝飾史』^{⑤7}他）。

このように貴金属工芸は盛況だったが、甲府本来の産業である水晶細工は苦戦を強いられていた。

水晶細工は江戸時代末期から甲府の特産品として知られ、庶民の宝石として明治時代には和・洋の様々な装身具を全国に供給してきた。

ところが大正初期になると極度の原石難にみまわれ、水晶業者はピンチに陥った。明治中期からの乱掘で水晶は掘り尽され、また四十年の大水害により各河川沿岸の開墾が禁止されたためである。

明治末期からは国内地産や朝鮮産のアメシスト原石なども移入したが、数量は少なく、たちまちのうちに使い果たしてしまった。

このピンチを救ったのは世界有数の水晶産地である南米ブラジル産の水晶である。

ブラジル産水晶は、大正七年（1918）、まず東京神田に設立された三栄貿易商会を通じて甲府の業者へ供給された。この時の原石はニューヨーク経由のものであったが、すぐに、他の貿易会社を通じて直接ブラジルから輸入するようになった。やがて直接輸入も始まり、大正九年以降は直接輸入量が増加。この原石を使って、大正末期（大正十四年）には水晶のネックレスが作られ輸出の花形となった（『水晶宝飾史』）。

地域産業動向③―若狭めのう細工

めのう（アゲート）は水晶と並ぶ庶民の宝石として、簪の玉などに幕末以来用いられ、大正期にも束髪簪の飾りや帯留の石として愛用された。

めのう細工は古くから若狭（福井県）や松江（島根県）の特産品

として知られるが、大正期になると北海道後志産（しゅべし）のもので各種装身具が作られた（『寶石誌』）。

めのうは採掘したままの生の原石はほぼ乳白色だが、これを火入れ（加熱）することによって赤味や黄色味のある部分を赤くして赤めのを作ることができるが、若狭ではこの方法をすでに江戸時代の享保年間（1716～36）には確立していた。

甲府で赤めのが作れるようになるのは昭和初期になってからである（『水晶宝飾史』）。